



早いもので、東日本大震災からきのうで四年が過ぎた。私も岩手県大槌町に三回、ボランティア

二千人を無料収容

（帝国ホテル⑦）



今も大勢の人が仮設住まいだ＝岩手県大槌町で  
震災当日、東京では自宅に帰れなかった人、毛布を貸してくれた、毛布が足りなくなったなら大判のバスタオルを出してくれた「外宅難民」が  
出た。東北地方の被災者が余りにひどく、報道はそちらに集中したが、

「近隣の外資系のホテルはドアを開けてもくれなかったのに、毛布を貸してくれた、毛布が足りなくなったなら大判のバスタオルを出してくれた」外宅難民は寒かったので、室内に入れてくれるだけでも有り難かったが、食料や水を差し入れてもらったなど、当日お世話になつた人の言葉が紹介されて

地震の直後、東京でも交通網がまひ状態になり、約十万人が自宅に帰れなかった。  
この時、帝国ホテルはロビーや宴会場を開放し、毛布、水、保存食などを無料で提供した。その恩恵にあずかった人は二千人を超えたという。  
そのことを私は全く知らなかった。昨年初めて誕生日を帝国ホテルで過ごしたあと、娘が送ってくれた雑誌「プレジデント」(二〇一一年五月三十日号)にそのことが掲載されていた。

いる。  
帝国ホテル二代目の「ライト館」が開業した大正十二(一九二二)年九月一日に関東大震災が発生したが、その際も避難して来た人たちにおにぎりなど食料を提供したという記録が残っている。



これこそが帝国ホテルの「伝統のおもてなし」の源流かもしれない。今の世の中は何かにつけて利益をあげることが最優先される中、利用客に対してだけのもてなしではなく、災害時のこのホスピタリティに帝国ホテルの温もりを感じる。  
元社長の犬丸一郎氏は「帝国ホテルの流儀」の冒頭に「ホテルは一本の鎖です。お客様に接する表舞台の数々の職種の担当から、清掃係など裏方のセクションが一本の鎖のようにつながっています。その一カ所が切れたら鎖としての評価はゼロ。百マイナスイは九十九ではなくゼロなのです」と書いています。  
確かにその通りかもしれない。我々が生活している社会もいろんな鎖でつながっている。連帯していることをほとんど意識せず、個人々々がバラ

バラに生きているのが現状社会ではあるまいか。震災の時、改めて人と人のつながりを再確認し、「絆(きずな)」という言葉がよく使われた。あれから四年が過ぎた今、絆という言葉も風化しつつあるように思える。  
今回、帝国ホテルの震災対応記事を読みながら、どうすればもっと「共に生きる」「ホスピタリティ」を意識して生活できるだろうかと、改めて考えさせられた。

「プレジデント」(2011年5月30日号)の震災時の帝国ホテルの記事